

秋の歌

寺田寅彦

青空文庫

チャイコフスキーの「秋の歌」という小曲がある。私はジンバリストの演奏したこの曲のレコードを持つている。そして、折にふれて、これを取り出して、独り静かにこの曲の呼び出す幻想の世界にわけ入る。

北欧の、果てもなき平野の奥に、白樺の森がある。歎くように垂れた木々の梢は、もう黄金色に色づいている。傾く夕日の空から、淋しい風が吹き渡ると、落葉が、美しい美しい涙のようにふり注ぐ。

私は、森の中を縫う、荒れ果てた小径こみちを、あてもなく彷徨さまよい歩く。私と並んで、マリアナ・ミハイロウナが歩いている。

二人は黙って歩いている。しかし、二人の胸の中に行き交ゆう想いは、ヴァイオリンの音になって、高く低く聞こえている。その音は、あらゆる人の世の言葉にも増して、遣やる瀬せない悲しみを現わしたものである。私がGの絃で話せば、マリアナはEの絃で答える。絃の音が、断えては続き続いては消える時に、二人は立止まる。そして、じっと眼を見交みわす。二人の眼には、露の玉が光っている。

二人はまた歩き出す。絃の音は、前よりも高くふるえて、やがて咽むせぶように落ち入る。

ヴァイオリンの音の、起伏するのを受けて、山彦の答えるように、かすかな、セロのよ
うな音が響いて来る。それが消えて行くのを、追い縋りでもするように、またヴァイオリ
ンの高音が響いて来る。

このかすかな伴奏の音が、別れた後の、未来に残る二人の想いの反響である。これが限
りなく果敢なく、淋しい。

「あかあかとつれない秋の日」が、野の果に沈んで行く。二人は、森のはずれに立って、
云い合わせたように、遠い寺の塔に輝く最後の閃光を見詰める。

一度乾いていた涙が、また止め度もなく流れる。しかし、それはもう悲しみの涙ではな
くて、永久に魂に喰い入る、淋しい淋しいあきらめの涙である。

夜が迫って来る。マリアナの姿はもう見えない。私は、ただ一人淋しく、森のはずれの
切株に腰をかけて、かすかな空の微光の中に消えて行く絃の音の名残を追っている。

気がつくとき、曲は終わっている。そして、膝にのせた手のさきから、燃え尽した巻煙草の
灰がほとりと落ちて、緑のカーペットに碎ける。

（大正十一年九月『渋柿』）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第二巻」岩波書店

1985（昭和60）年9月5日第3刷発行

初出：「渋柿 第一〇一号」

1922（大正11）年9月10日発行

※初出時の署名は「寺田藪柑子」です。

入力：Nana ohbe

校正：佳代子

2003年12月14日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

秋の歌

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>